

生活文を書こう

日常の経験や出来事から印象に残った事柄を選んで文章に書き表してみよう。

1 題材を見つけよう

各自の体験から心に残っていることを探して、構想メモ用紙に書き込んでみよう。

《題材例》

家庭生活 <ul style="list-style-type: none"> ・家族とのふれあい ・父の仕事 ・母の仕事 ・家業の手伝い ・家族旅行 ・兄弟げんか ・家事 ・帰省 	家庭生活 <ul style="list-style-type: none"> ・家族とのふれあい ・父の仕事 ・母の仕事 ・家業の手伝い ・家族旅行 ・兄弟げんか ・家事 ・帰省
社会生活 <ul style="list-style-type: none"> ・友達 ・文通 ・旅行 ・ボランティア ・大会参加 ・体験学習 ・講習会 ・研修参加 ・校外での交流 ・海外との交流 	社会生活 <ul style="list-style-type: none"> ・友達 ・文通 ・旅行 ・ボランティア ・大会参加 ・体験学習 ・講習会 ・研修参加 ・校外での交流 ・海外との交流
学校生活 <ul style="list-style-type: none"> ・校外学習 ・野外活動 ・修学旅行 ・テスト ・合唱コンクール ・文化祭 ・弁論大会 ・球技大会 ・陸上記録会 ・部活動 ・マラソン大会 ・委員会活動 ・学級のできごと 	学校生活 <ul style="list-style-type: none"> ・校外学習 ・野外活動 ・修学旅行 ・テスト ・合唱コンクール ・文化祭 ・弁論大会 ・球技大会 ・陸上記録会 ・部活動 ・マラソン大会 ・委員会活動 ・学級のできごと
自然や季節・その他 <ul style="list-style-type: none"> ・庭仕事 ・菜園作り ・新緑 ・梅雨 ・海水浴 ・台風 ・中秋の名月 ・落葉 ・初雪 ・登山 ・釣り ・キャンプ ・スキー 	自然や季節・その他 <ul style="list-style-type: none"> ・庭仕事 ・菜園作り ・新緑 ・梅雨 ・海水浴 ・台風 ・中秋の名月 ・落葉 ・初雪 ・登山 ・釣り ・キャンプ ・スキー

2 材料を集め、文章の構成を考えよう

書くための材料をたくさん集めて、それを、場面ごとに整理し、書く順序を考えてみよう。

(1) 書くための材料を集めよう

参考文は、「父が育てたカサブランカ（百合の花）の栽培」を題材として書かれている。まず、文章を読んでみよう。

この作文は、時間の流れに従い、場面を次のように書いている。

- 1 育てるきっかけになった母の一言 (書き出し)
- 2 初冬、カサブランカの球根を植える父
- 3 春、生長するカサブランカを見る父
- 4 つぼみに気を遣う家族
- 5 咲いた花を見る家族や近所の人々
- 6 カサブランカに込められた父の思い (結び)

これを参考にして、あなたが選んだ題材について、自分のいちばん伝えたいことに関係のある事実や体験から「思いつく場面」を構想メモ用紙に書いてみよう。

(2) 文章の構成を考えよう

参考文は、時間の流れに従って1〜6まで書き進められている。このほか、最初に回想場面をもってくる方法などもある。

3 文章に書いてみよう

書く順序（構成）が決まったら、その順序に従って書き始めよう。構成は骨組みなので、それぞれの場面ごとに自分の考えたことや感じたことを付け加えたり、情景や周りの様子などをわかりやすく具体的にふくらませたりしながら書くことが大切である。言葉を一つ一つ選び、表現を工夫しながら、生き生きとした文章になるように書いてみよう。

(1) 〈書き出し〉を工夫しよう

次の例は参考文献の書き出しである。引用を用いた書き出しが印象的である。映画の題名を取り上げ、さらに「」を付けることで、読む人の心をとらえ、「カサブランカ」を強く印象づける効果がある。

「カサブランカ」、それは古い映画のことではない。それは、花好きな母を喜ばせようと父が植えた白い百合の花のことだ。特に母はカサブランカの美しさにひかれていた。

〈書き出し〉は文章の生命を決定するといつていいほど大切である。このほかにも書き出し方の例を挙げるので参考にしよう。

- ① 会話による書き出し……自分自身やほかの登場人物の会話文から書き出す。

「母さんなんか大嫌いだ。」
ぼくは思わずこう叫んで部屋を飛び出した。

- ② 描写による書き出し……あたりの場面の様子や情景の描写から書き出す。

突然周囲が真っ暗になり、大粒の雨が激しく降り出した。

- ③ 回想風の書き出し……時の順序を変え、回想風に書き出す。

それは今年の二月のことです。私の家に一本の電話がありました。

- (2) 場面を具体的に詳しく書いてみよう

どこを、どう詳しく書けばよいのか。次の①、②について、上の文と下の文を比べてみよう。

- ① 「情景」や「場所の様子」を詳しく書く。

真っ白い大きな花が咲いた。いい香りもある。

直径二十センチぐらいありそうな、大きな大きな花である。まるでシルクのような輝きを持ち、それはそれは美しい純白の花が咲いた。そして甘い香りを漂わせていた。家族皆、幸せな香りに包まれた。

② 「人物の様子」や「心の動き」を詳しく書く。

体の大きな父がベランダで球根を植えていく。

父は、学生のころからラグビーをしていて、体はかなり大きいほうである。その大きな体を狭いベランダで小さく丸めて、肥料の位置や量を考えながら、一つ一つていねいに植えていく。……父の頭の中には、……美しく大きく咲いたカサブランカが描かれているかのように、顔いっぱい喜びに満ちている。

(3) 効果的な表現を工夫しよう

① たとえ（比喩・擬人法）

そのまま直接表現するより、それと似たもの（共通点のあるもの）に置き換えて書いてみると、より具体的でわかりやすく、生き生きと表現できる。

- ・ まるで我が子の成長を喜ぶ親のようだ。（比喩）
- ・ 芽は、春の光を浴びきらきら輝きいばっている。（擬人法）

② 擬声語・擬態語

音声をまねて言葉にした擬声語、様子をそのまま言葉に表した擬態語などを使うと、より具体的に生き生きと描くことができる。

- ・ 「ドンカラカッタ、ドンカララン。」
太鼓の音が響いています。（擬声語）

- ・ 母は、体をくねらせ、ふうつとため息をついて、洗濯物を干している。（擬声語）
- ・ 芽は、春の光を浴びきらきら輝きいばっている。（擬態語）

③ 繰り返し（反復法）

同じ言葉をたたみかけるように繰り返すことによって、書き手の気持ちを強く印象づける効果が出てくる。

- ・ 大きな大きな花である。それはそれは美しい純白の花が咲いた。
- ・ カサブランカも次から次と咲いて、

④ 倒置法

書き手の言いたいことを先に出して強調し、読み手に印象づける方法である。主語と述語、修飾語と被修飾語の順序を入れ替えたりする。

でも、十一月も終わるころ父はまた球根を植えるだろう。狭いベランダで、体を丸め母の喜ぶ顔を思い浮かべながら、幸せそうな顔をして。

(4) 〈結び〉を工夫しよう

〈書き出し〉や、各場面の表現と対応させて、文章としてのまとまりをつけることが大切である。主題が印象深く、感動的に読み手の心に残るような〈結び〉を工夫してみよう。

<書き出し>

「カサブランカ」、それは古い映画のことではない。それは、好きな母を喜ばせようと父が植えた白い百合の花のことだ。特に母はカサブランカの美しさにひかれていた。

毎年十一月末から十二月にかけて、カサブランカの球根を父が鉢に植える。球根から育てるのである。……父の頭の中には、夏の晴れた日、美しく大きく咲いたカサブランカが描かれているかのよう
に、顔いっぱい喜びに満ちている。

<結び>

今では、すっかり花の終わったカサブランカ。花屋に行ったら高価な値段で、いくらでも切り花として買える。でも、十一月も終わるころ、父はまた球根を植えるだろう。狭いベランダで、体を丸め母の喜ぶ顔を思い浮かべながら、幸せそうな顔をして。

4 推敲しながら、清書しよう

文章ができあがったらよく読んで、自分の印象に残ったことが生き生きと書かれているかどうかを考えたり、家族や友達、先生に読んでもらったりして、不十分なところを書き直してみよう。文章は推敲すればするほど、よいものになっていくものである。

○推敲するときは、次の点に注意しよう。

1 構成

- ① 書き出しと結びが対応しているか。
- ② 各段落のつながりは適切か。

2 内容

- ① 工夫した書き出しになったか。
- ② 場面ごとに具体的に書くことができたか。
- ③ 効果的な表現になるように工夫できたか。
- ④ 読み手の心に残るような結びになったか。

3 表現

- ① 主語・述語の対応など、文に乱れはないか。
- ② 文体が敬体（「です」「ます」調）か常体（「だ」「である」調）に統一されているか。
- ③ 言葉の使い方は正しいか。

※文集「こだま」の生活文を読んで参考にしよう。